第93号国分寺長野県人会会報
令和４年９月発行総務委員会

国分寺市の信州人

総会・懇親会への参加ありがとうございました

令和４年度定時総会が６月２１日、ココブンジプラザリオンホールにて開催されました。

コロナ禍のため会員の集まりとしては、令和２年新年会以来の２年半ぶり、総会としても３年ぶり、更に初めての開催会場でしたが、６０名の会員が出席しました。山石総務委員長の開会宣言、新海会長の挨拶のあと、行事計画、予算計画、役員の交代が承認され、令和４年度のスタートをきることができました。

今回役員を退かれることになった竹内悟さん、加藤豊子さん、中川秀夫さん、名取敏彦さん、これまでありがとうございました。

また、新たに役員となられた、坂田良治さん（副会長兼会計委員長）、柳澤盛樹さん（会計副委員長）、牧田健三郎さん（親睦委員）、これからよろしくお願いいたします。

第二部では＜長寿祝い＞として、米寿：大　　さん（　町）、喜寿：宮　　さん（　　ヶ　A）に　　会長より記念品の贈呈があり、新入会員の紹介では初参加となる　巻　　さん（　　ヶ　）から挨拶をいただきました。また、住まいを故郷の　　市　平に移した　　隆　さん（　多）からも挨拶をいただきました。

演奏会では長野市出身のクラシックギターリスト篠原正志さんに出演いただき、楽しいトークを交えながら、映画「禁じられた遊び」に「信濃の国」の旋律を挿入した美しい演奏から始まり、「アルハンブラ宮殿の想い出」「花は咲く」などの演奏にうっとりさせてもらいました。

最後に坂　・新　　長による締めの音頭で約２時間の会が終了しました。（なお、総会終えての打上げの場で演奏者・篠原正志さんから、県人会への入会申し込みがあったことを付け加えさせていただきます。）

おらが町Today ⑭　わが心の南佐久

私は東信の南佐久郡佐久穂町、以前は旧八千穂村、更に遡れば旧千代里村で生まれました。元々転入者の為、親戚縁者はおりません。当時は戦後の復興途上、一方、この山間僻地では、まさに「まんが日本昔ばなし」の世界でした。文明の匂いと言えば電気位で水道もガスもなく冬の暖房は囲炉裏と炬燵といった程度でした。布団を何枚も重ね寒さに震えながら寝たものです。味噌や醤油も完全な手作りで、保存料など使わない優しい味でした。風呂は木桶で井戸水を注ぎ煙にいぶされながら薪で湯を沸かしました。

八千穂高原の白樺林

正月を迎える頃になると飼育したウサギがご馳走になり醤油漬けにして食べました。塩分過多で脳梗塞を発症、半身不随や命を落とす人が珍しくありませんでしたが、その因果関係などは分からない時代でした。夏は川で泳ぎ、冬は田んぼに水を凍らせた特製リンクの上を下駄スケートで滑りました。昭和30年代になると洗濯機やトランジスタラジオ、そしてテレビの登場により、にわかに生活水準か上がりました。我が家の自慢は、いち早くテレビを購入し、昭和34年、皇太子ご成婚パレードの折、近所の人たちがそれを見るために集まってきたことです。

最寄りの駅は徒歩で１０分ほど、千曲川対岸にある小海線の佐久穂積駅（現：八千穂駅）でした。後年、母と妻を連れ車で訪れたところ、かつての賑わいは影を潜め無人駅に様変わり、誰もいないホームにたたずむと名曲「北国の春」が頭をよぎりました。作詞家（いではく）はさらに上流の南牧村出身で歌手（千昌夫）の故郷である岩手県を訪れたことがなかったので自分の故郷の情景をイメージし（山国を）北国として作詞したとの記事を思い出しました。

白駒池をバックに妻と記念写真

今では快適なドライブウェイになり峠を越えれば茅野市に通ずる国道299号線（八千穂高原道）は狭くて熊笹が覆う道でした。白駒池などははるかに遠く子供の足では到底訪れることのできない秘境でした。

生家は高校を卒業した直後に売却し、すでに影も形もありません。しかしながら脳裏には炊事・洗濯する祖母の姿、居間や囲炉裏端に台所・縁側・井戸などがはっきりと浮かんできます。団塊世代も後期高齢に突入。国分寺市に終の住まいを得て故郷を想うたびに「よく生きてきたな」と感慨無量になります。

＜新入会員紹介＞

地区	氏名	住所	電話	出身地

『作物たち』のそもそもばなし　①ナス

【ナスはもともと緑色】

私たちがふだん食べている野菜や果物はいつどこから来たのだろう？・・・そんなことを考えたことがありますか？

作物は本来野性の植物で、遠い昔に誰かがそれを見つけ出し栽培を始めたものです。その後、長い年月をかけて世界中に広まり、その間により「美味しく」「収穫が上がる」ように改良されてきました。現在、日本では野菜だけでも約百五十種類、果物や穀物などを含めると、四百種類もの作物が栽培されています。しかし、そのうち日本原産のものは数えるほどしかありません。作物のほとんどは外国から入ってきたものなのです。

私たちが、このような作物の原種（もととなった植物）を見ることはほとんどありません。今となっては原種がよく分からないものさえあります。左の写真を見てください。これは何でしょう･･･そう､ナスです。これはスリランカに生えている原種に近いナスで、色は緑、大きさはウズラの卵くらいです。日本ではナスは紫色だと思われていますが、ナスはもともと緑色なのです。今日見られるナスの紫色は突然変異によって作られるようになったアントシアニンという色素によるものです。このように今日私たちが食べている作物は、その本来の姿とはずいぶん異なることが多いのです。これから作物の「ルーツ」を探ってみましょう。

まずは信州名産『おやき』の具材で野沢菜の次にポピュラーなナスの話です。

【作物の「ルーツ」を探る】

ナスのふるさとはインドです。今でもインドには野性のナスが自生しており、そのうちいくつかが自然に掛け合わされて、現在のナスのもとが作られたと考えられています。日本にいつ伝えられたかは不明ですが、平城京の遺構から発見された木簡（荷札）に「茄子」の文字があり、奈良時代には栽培されていたことが分かります。飛鳥時代に遣隋使や遣唐使が持ち込んだとも考えられます。あるいはそれ以前に入ってきたのかもしれません。

さて、先ほど紹介したように、ナスはもともと緑色で、他にも白・黄・赤などがあります。日本にも昔はいろいろなナスがありました。江戸時代の『農業全書』には「ナスビには紫･白･緑の三色がある。また丸いものや長いものがある。このうち丸くて紫のものをつくるのが良い。他は良くない」と書いてあります。現在は一部の地域で緑ナスが復活したり、輸入の白ナスを栽培する農家もありますが、日本全体では紫色以外のナスはほとんど姿を消してしまいました。

このように長い年月の間に、それぞれの国や地方で、その土地の人々に好まれる作物が選び出されてきたのです。 作物は人間が長い間かかって作り上げてきた文化遺産ともいえるものです。その「ルーツ」（起源）と歴史を知ることは、日々の食生活の知識として、味わいと楽しみを与えてくれるのではないでしょうか。このシリーズでは身近な作物のいわば「履歴書」をご紹介していきたいと思います。

（提供：

＜編　集　後　記＞

前回（令和元年）総会の参加人数は 64 名。それに劣らぬ盛況な総会となったことに感謝でした。「わが心の南　久」では、厳しかった子供の頃の冬を思い起こしましたが、　　島生まれの女房に「それでも信州人？」と言われるほど、今では寒さには根性無しです。今回から身近な作物のルーツシリーズがスタートしました。今後の連載をご期待ください。（　　）